

「トンネルを抜けると神の恵みがあつた」 列王記上 19 章 1 節～ 1 2 節

## I 導入部

おはようございます。9月の第一日曜日を迎えました。暑い夏の季節を乗り切った方々が、今日礼拝に出席されていると思います。今日も、礼拝によるこそおいで下さいました。皆さんを心から歓迎いたします。

私は暑い8月の月は、病院で三食昼寝付きで過ごしておりました。皆さんに祈っていただいた右膝の人工関節置換手術も無事終わり、辛いリハビリをして、昨日、計画退院致しました。皆さんのお祈りとお励まし、お見舞いを心から感謝致します。

いつもなら、私が病院にお見舞いに伺う立場ですが、今回は逆でお見舞いを受ける立場になり、大きな慰めと励ましをいただきました。教会学校の子供たちや信徒の方々から手紙やはがき、励ましの言葉をいただいて、本当に痛い、辛い経験をしましたが、励まされました。強められました。本当に心から感謝申し上げます。

毎日朝は聖書を読んで祈るのですが、手術が終わり、麻酔やブロック注射の効き目が切れると、それは、もう我慢できないほどの痛みでした。担当の医師は、痛かったら痛み止めを出しますから、と言われてましたが、いくら痛み止めをもらっても、まったく効かない。効かないから、またつらいという経験をしました。3日間の激痛の時、このような時こそ聖書を開いて祈ってと思いましたが、激痛の三日間は聖書も読めず、祈れませんでした。牧師ともあろう者が、このような大変な時こそ、激痛に苦しむ時こそ、祈るべきだと思いましたが、できませんでした。皆さんに、激痛でどうしようもなかったですけども、聖書を読んで励まされ、祈りで力が与えられ、痛み止めでは痛みは消えませんでした。聖書のみ言葉と祈りで痛みが取り除かれました。ハレルヤと証したかったのですが、聖書も読めず、祈れなかったというのが、現実でした。けれども、痛みを苦しむ私のそばに、イエス様が共におられるということは感じる事ができました。こういう時こそと聖書を読めない牧師、祈れない牧師を受け止め、抱きしめて下さるイエス様の深い愛を感じる事ができました。

私たちは、クリスチャンとして、信仰者として、聖書の言葉、神の言葉と祈りは力となります。けれども、聖書の言葉も祈りもできないというようなことを経験することもあるのだと思うのです。

今日は、列王記 19 章 1 節から 1 2 節を通して、エリのヤ姿を通して、「トンネルを抜けると神の恵みがあつた」という題でお話ししたいと思います。

## II 本論部

## 一、大勝利の後が大切

「国境の長いトンネルを抜けると雪国だった」という川端康成氏の長編小説があります。別に関係ないのですが、私自身のこの25日間の歩みは、暗いトンネル、苦しみや痛みの伴うトンネル、出口の見えない痛みの中で、やがてトンネルを抜けると、そこには、苦しみや悲しみだけではなく、神様の恵みがあったということ強く感じたので、今日の説教題になりました。その説教題は、今日の箇所に出てくる預言者エリヤの姿でもあるように感じたのです。

預言者エリヤは、旧約聖書に登場する預言者の中では有名であり、力強い働きをした人物です。イエス様が変貌の山で、真白く輝いた時、モーセとエリヤと会話したことが福音書には記されています。まさに、預言者の代表者がエリヤであったのです。

エリヤは列王記上の18章では、バアルの預言者たちと神比べをして、大勝利した信仰の篤い人物です。エリヤ一人と何百人という偶像礼拝をする預言者たちと戦っても、ひるむことなく、ただ真の神様を信じて、信じ切って、大勝利を取めたのです。神様を信じる者に、神様は火を持って答えて下さったのです。エリヤの信仰、素晴らしい信仰です。

ところが、列王記19章に入ると、エリヤの様子がちょっと変です。いや、随分変です。

アハブ王はエリヤが神比べで勝利しバアルの預言者たち皆殺しにしたことを妻のイゼベルに伝えました。それを聞いたイゼベルは言います。2節です。「イゼベルは、エリヤに使者を送ってこう言させた。「わたしが明日のこの時刻までに、あなたの命をあの預言者たちの一人の命のようにしていなければ、神々が幾重にもわたしを罰してくださるように。」

リビングバイブルには、「よくもわたしの預言者たちを殺してくれた。神々にかけて言うておくけど、明日の今ごろまでに、お前の命はないものと覚悟するがいい!」とあります。

バアルの預言者たちと神比べをして、大勝利したエリヤは、イゼベルの言葉にひるむはずはない。イゼベルの言葉は何の力もないと思います。しかし、エリヤは、そんな脅しには屈しない。私には、神が共におられる、と言ってイゼベルの脅しにはのらないというのが流れです。しかし、現実は違いました。3節、4節です。「それを聞いたエリヤは恐れ、直ちに逃げた。ユダのベエル・シェバに来て、自分の従者をそこに残し、彼自身は荒れ野に入り、更に一日の道のりを歩き続けた。彼は一本のえにしだの木の下に来て座り、自分の命が絶えるのを願って言った。「主よ、もう十分です。わたしの命を取ってください。わたしは先祖にまさる者ではありません。」 えっ何という感じではないでしょうか。エリヤどうしたの。何があったの?とエリヤに聴きたい気がします。預言者やめますなのです。

エリヤはイゼベルの言葉を恐れたのです。逃げたのです。このような脅迫がある時こそ、信仰に立って、神様を信じて行くべきなのです。しかし、エリヤは恐れ、逃げたのです。

なぜ、エリヤが恐れ、逃げたのか、理由は書いてありません。神比べをして、火を持って答える神を神と信ぜよ、と語り、火を持って答えた神様に、イスラエルの人々は、「主こそ神です。主こそ神です。」と神様をあがめたのです。そして、戦いに敗れたバアルの預言者たちを殺した。これで解決したと思った。アハブ王もイゼベルも火を持って答えた神をあがめるのかと思いきや、エリヤを脅してきたのです。エリヤの信仰や勝利を通して、みんなが神様を信じるようになったのではなく、現実は何もかわらなかったのです。かえっ

て、勝利したことで命をねらわれたのです。自分の命を懸けての信仰の勝利も、何の役にも立たない。何も変わらない状況にエリヤは疲れ果ててしまったのではないのでしょうか。このような時こそ、信仰を働かせて、神様を信頼してとはならないのです。私たちも、そのような状況に立たされ、神様を信じ切れない、信頼できないということがあるでしょう。

## 二、神様はそばにいる

神様を信じ切れないで、信頼できないでイゼベルを恐れ、逃げ出したエリヤと神様は共におられました。弱いエリヤの姿を見ておられたのです。5節、6節には、「彼はえにしだの木の下で横になって眠ってしまった。御使いが彼に触れて言った。「起きて食べよ。」見ると、枕もとに焼き石で焼いたパン菓子と水の入った瓶があったので、エリヤはそのパン菓子を食べ、水を飲んで、また横になった。」

イゼベルの言葉に恐れ、逃亡し疲れ切って眠ってしまったエリヤにみ使いを通して「起きて食べよ」とパンと水を用意して下さったのです。エリヤはまた休み、また、パン菓子と水を与えて下さったのです。

イゼベルの前から逃げ出してしまったエリヤは、預言者としては失格者でしょう。このような時こそ、信仰を持って、聖霊に満たされて、と外野、人は言う。けれども、エリヤは疲れたのです。自分の預言者としての自信を失ってしまったのです。大勝利の後のエリヤの姿はまるで別人でした。大きな働き後は、本当に気をつけるようにとよく言われます。イエス様は、福音書を見ると、大きな働き、奇蹟の業をなされた後は、かならず、静まって父なる神様と深く交わる時を持たれました。人々が驚く奇蹟の後、人間イエス様としては傲慢な思いや自分の力を誇りとするということはないでしょうけれども、そのような事がないように、自分は父なる神様に従って行動していることを確認されたのではないのでしょうか。静まって、その奇蹟は父なる神様のわざであること確認したのではないのでしょうか。

エリヤは、自分を通してなされた神様の働きの大きさに驚き、勝利に酔い、自分の神様を信じる信仰の勝利を喜んだのではないのでしょうか。それなのに、変わらない現実、自分のしてきたことの無意味を感じたのだと思うのです。

そのようなエリヤを神様は励まして下さいました。食事と水で元気を取り戻し、四十日四十夜歩いて神の山ホレブに着いたのです。エリヤは洞穴に入り夜を過ごしたのです。神様はエリヤに語ります。9節。「エリヤよ、ここで何をしているのか。」エリヤは答えます。10節です。「エリヤは答えた。「わたしは万軍の神、主に情熱を傾けて仕えてきました。ところが、イスラエルの人々はあなたとの契約を捨て、祭壇を破壊し、預言者たちを剣にかけて殺したのです。わたし一人だけが残り、彼らはこのわたしの命をも奪おうとねらっています。」」エリヤは神様のために一生懸命に働いて来た。大勝利も収めた。頑張った。」しかし、イスラエルの人々は、神様に立ち返らない、神様から遣わされた預言者を殺した。そして、ただ預言者として残っている私の命を奪おうとしている。もういや！という感じではないでしょうか。自分のやってきたことに何の報いもない。悪くなる。そのような時、人は、疲れ、投げやりになり、投げ出したくなるのでしょうか。預言者エリヤも同じでした。

### 三、細き声が心に響く

神様は、エリヤに「そこを出て、山の中で主の前に立ちなさい」と言われました。非常に激しい風が起こり岩を砕きました。地震が起こりましたが神様はおられなかった。火が起こりました。神比べの時、火を持って答えられた神様、そこにはおられなかったのです。大風や地震や火といった力強く見える所に主はおられなかったのです。火の後に、静かにささやく声が聞こえたのです。

エリヤは預言者として大きな働きをしてきました。しかし、今までにしてきた事がエリヤにとっては力にならない。かえって恐れや不安を生み出したのです。風や地震や火といった目に見える大きな出来事、奇蹟、そのような場所に主はおられなかった。静かにささやく声が聞こえた。今のエリヤにとって、奇蹟や驚くべき事柄、風や地震や火というものには、心響かないのです。今のエリヤには、大きな信仰で大勝利を収めるということではなく、恐れや不安の中で、静かにささやく主の声、この声こそが、エリヤの心に沁み込んできたのです。恐れや不安におののき、逃げ隠れするエリヤのそばに主はいつも共におられたのです。

私たちも、大きな集会、多くの人数、多くの賜物が用いられる集会と魅力があります。神様の大きなみ業が起こることを願います。しかし、そのような力強い歩みではない。どちらかというところ、不信仰、弱さを経験する時こそ、私たちは、神様の声に触れることができるのです。エリヤには、静まって神様と交わることが必要だったのです。

イエス・キリスト様は、驚く奇蹟を数々行われました。多くの人はその奇蹟の業に酔いしれました。けれども、イエス様の第一の使命は、最も弱い者となり、私たちの身代わりに罪人となって十字架について死ぬことでした。イエス様の驚くべき業を見た人々は、十字架からおろす。その奇蹟を見たら信じようと言いました。イエス様は十字架から降りることができました。しかし、イエス様の使命は、私たちの罪の身代わりに十字架に死ぬことだったのです。そのイエス様は死んでよみがえり、復活の力を示されたのです。イエス様の弱さの中にこそ、神様の愛が示されているのです。

エリヤは最も預言者としてふさわしくない状況の中で、そんな自分と主が共におられたこと、自分を励まし、支え、静かにささやく声を与え、バアルにひざまずかない7千人を残す。エリヤ一人ではないと励まして下さったのです。私たちも、クリスチャンとして、神様を信じているのに、信じられなくなったり、恐れたりしてしまう者です。しかし、神様はそのような私たちを愛し、必要なものを与え、弱さの中にこそキリスト様の力があることを示して下さいます。

### III 結論部

私は右膝の人工関節の置換手術を行いました。痛いのはわかっていましたが、こんなに痛いとは思わなかった。8日の木曜日に手術をして、9日の金曜日に麻酔やブロック注射が覚めて、痛みの極みを経験しました。痛み止めを飲んでも痛み止めの点滴をしても一向に痛みがおさまらない。そのような苦しき、激痛を経験している時、金曜日でもありまし

だからイエス様の十字架の苦しみを思わされました。イエス様は全身の苦痛の中で与えられた没薬を混ぜたぶどう酒（痛み止め）を拒否されました。人間の罪の身代わりに苦しみをイエス様は一身に受けられたのです。私は、痛み止めを下さいと言って痛みが和らぎました。それも痛い。しかし、イエス様は痛み止めを拒否された。同じ痛みでも意味が違います。寝ていても、座っていても激痛が走る。そのような経験の中で、イエス様の十字架の苦しみを少しでも体験できたことを感謝しました。

私たち人間は、肉体を持つ以上肉体的な痛みは避けられません。疲れや恐れもあります。私たちはそのことを経験します。真っ暗なトンネルの中において、出口がないように見える。しかし、そのような痛みや苦しみを通して、私たちは、イエス様が痛んでいる、苦しんでいる私のそばにおられること、神様の恵みがたくさん用意されていたことに気が付くのです。

神様は私たちの祈りに沈黙されているように感じる時があります。しかし、神様は、沈黙の中にご自身を現して下さるお方なのです。何も答えがないように見える時こそ、イエス様は私たちのすぐそばにいまし、私たちを見守り導いて下さるのです。私たちは疲れてもいいのです。恐れてもいい。クリスチャンらしくなくてもいい。私たちがどのような状況でもイエス様は変わらずに私たちを愛して励まし、強めて下さるのです。このイエス様と共に、この週何があっても、イエス様と共に、イエス様に従ってまいりましょう。